

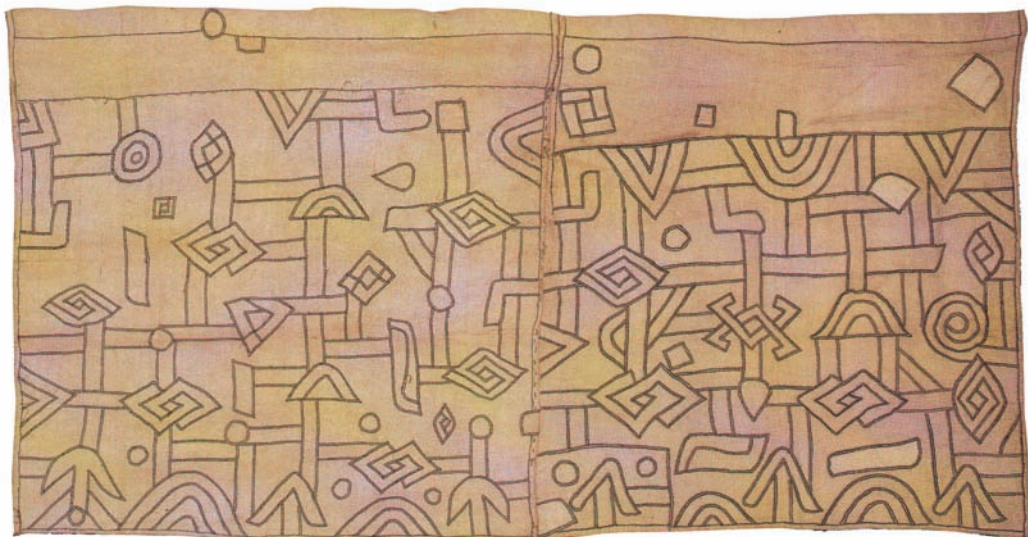
アフリカ大陸中央部に、アマゾン川に次いで世界第2位の流域面積と流量を誇るコンゴ川が流れている。流域の熱帯雨林もアマゾン川に次ぐ広さを持つ。このコンゴ川の支流カサイ川とサンクル川に挟まれた地帯で17世紀あたりに18の民族集団から成るクバ王国が誕生し、周辺のコンゴ王国とともに栄えていた。

そのコンゴ王国は、やがてポルトガル支配下で奴隷貿易の中心地となり、19世紀にはポルトガルとベルギーの植民地として分割統治された後、コンゴ自由国、ベルギー領コンゴ、コンゴ共和国、コンゴ民主共和国、ザイル共和国などと国名が変わり、現在はコンゴ民主共和国に戻っている。クバ王国はあまりにも内奥にあったせいか奴隷貿易の影響は受けなかったらしく、現在はコンゴ民主共和国のエリア内に位置している。

クバ王国の中心となるのがブショング族で、現在でも王や王族を引き継いでいる。クバの衣装はラフィア椰子の葉の繊維で作られており、男性用が「マフェル」、女性用が「ンチャク」と識別される。「マフェル」は地位や関係が定められた装飾ルールで作られるのに対して、「ンチャク」は決まり事はなく自由表現が主体となっている。そしてブショング族が絵画的なアップリケ、ショワ族が幾何模様の草ビロード、ンゴゴ族が抽象的な絞りなど、それぞれの民族が独自の技法とデザインを継承発展させてきた。

写真にあげるのはブショング族のアップリケである。80cmの布を基本単位としてアップリケを施し、それを10枚つないで布衣装となるのだが、一生のうち3着から多くても6着ぐらしか作れないという。一つ一つのアップリケが黒系による二重輪郭線で糸通しされて、実に息のながい作業時間が費やされるのだが、これは決して強制された重労働ではなく、むしろ真逆の、創作の神と対話できる至福の時間のうちに作られた賜物なのである。ゆえにハレの舞台装束や死装束として用いられ土族に保管されていたが、近年では外部に売り払われることが多くなったようだ。

布をなめす工程で生じた穴や着用で生じたほころびを充てがうところからアップリケが始まったに違いないが、やがて穴やほころびにかかわりなく、当て布そのものがモチーフとなって絵画のように発展したのである。クバの人たちは現代絵画など知る由もないが、この芸術性の高さに驚くばかりである。微妙に異なるモチーフが不連続に繰り返されながらも全体的には一定の秩序を持って統一されている。ピカソやクレーも及ばない精霊たちと直交する表現世界がここにはある。



『クバ王国のアップリケと草ビロード アフリカン デザイン』渡辺公三・福田明男 里文出版より